

目 次	
P 1 巻頭言 菊地賢介監事	P15 新年会員懇親会
P 2-11 シンポジウム「エネルギー需給と気候変動を考えて」	P16 スペイン大使館訪問記
P 12-13 講演会 講師テンブル大学ストロナク学長	P17 茶の湯体験教室
P 14 ディプロマツツ・レクチャー 講師横井裕氏	P18 事務局便り／編集後記

オーストリア・グラーツに今も残る日本の芸術文化

港ユネスコ協会監事 菊地賢介



昨年秋にオーストリアのシュタイヤーマルク州 グラーツに滞在する機会に恵まれました。

14世紀にハプスブルク家の都となった古都で、人口は24万人。数多くの温泉、変化に富む風景と牧歌的な雰囲気、またワイン愛好家にも大人気です。旧市街はユネスコ世界文化遺産に登録され、ウィーンに次ぐオーストリア第2の地方都市です。

多くの文化遺産が点在する旧市街を散策しながら、エッゲンベルク城に立ち寄り、あらためて多様な文化に触れる事が出来ました。

築城は今から380年前で、城主が宇宙感を表した城内の、3階フロアは52(1年の週数)の窓が取り付けられ、建物全体では365の窓になるよう設定され、日常必要な教会、大広間と24の豪華な部屋が配置されています。その一つに「日本の間」が設けられ、室内はまるで日本の芸術・文化の宝箱のようでした。

日本の工芸美術品は、城主が東インド会社などから買い付けたものとみられ、数ある陶磁器はガラスケース越しでの判断ですが、ウィーンのシェーンブルン宮殿で皇帝フランツ・ヨーゼフ1世・エリザベート皇后が多くの晩餐会で使用されたであろう「古伊万里」と同じ染付色付けであり、形状も数百年前そのままの状態で見られていました。他にもシノワズリー「中国趣味」も当時の流行りであったようで、東洋の工芸品が数多く目に留まり、大変興味深く観賞することが出来ました。

また、「日本の間」の壁面を彩る装飾として、16世紀の安土桃山時代における、大阪城下の街並みから、京都宇治の平等院までが描かれた「大坂図屏風」が嵌め込まれています。ここには豊臣期の約10年の間の、街並みの佇まいと庶民の賑わいの光景が描かれていて、大変貴重な歴史的資料として保存されており、日本でも話題を呼んだそうです。

エッゲンベルク城を訪れて、日本の芸術、文化に触れ、世界中の大勢の人々の心を魅了しつづけていることに日本人として大変、誇らしげな気持ちになりました。

海外であらためてユネスコ世界遺産の素晴らしさを体験したのと同時に、日本国内でも、これからユネスコ世界遺産になり得るであろう、先祖から受け継いできた、伝統文化、建築技術、遺跡などの、価値ある預かりものを、大事にすることの大切さを感じました。そして、次の世代を担う青年達と我々の子、孫達にも伝えて行く活動に港ユネスコ協会のフィールドのなかで携わって行ければと願っています。